



e-La Voz

「エー・ラ・ボス」と読みます

HCJB『アンデスの声』 日本語放送 メールマガジン (第23号)

2004年10月25日発行

シカゴ報告

「とかすカ - 愛」混血児 桂子さんの歩んだ道

桂子さんにはじめて会ったのは、34年前サンフランシスコ郊外にあるサンロレンソ日本人教会だった。日曜礼拝のあと教会員と会食をすませ席の片づけにかかったとき、肌が黒く髪が縮れた女の人が皿のうえにあまった茶菓子を手際よくナプキンに包んで“おひねり”にして私たちの3人の子どもたちにそれぞれ手渡してくれた。その立ち居振る舞いはまぎれもなく日本人。「ああ、あの方ですか。日本生まれで、日本育ちですよ。」と牧師さんに説明されて納得した。次に桂子さんと会ったのは、1990年(平成2年)だった。こんどは親しげに向こうから声をかけてきた。「尾崎さんのことが本に書いてありましたよ。」「なんの本ですか。」「お母さまが書いた本です。私のお母さまは森繁杏子(森繁久彌夫人)です。」

杏子夫人は生前南米の日系人移住地を巡回したことがある。趣味の世界旅行で各国をたずねながら移住家族の慰安になればと森繁久彌主演の映画をみせてまわった。エクアドルでは「アンデスの声」に出演、はじめはガラパゴス諸島、二度目は南極の話を送ってもらったが、その折の尾崎家での印象が夫人の著書『ばばの手紙』に出ていたのだ。「先日お母さまが亡くなられたのでお葬式で日本へ行き、その本をいただき読んだら尾崎さんのことが出ていたのです。」桂子さんは続けた。「森繁夫妻に養女にもらったのです。ふたりのかけがえのない愛がなかったら今の私はありません。」

自分のこれまでの歩みをふりかえりながら桂子さんは、その経緯をこう語ってくれた。「私は佐世保で生まれました。アメリカの海軍基地があり、私みたいなミックスはたくさんいたので、いつもいじめられました。その内こんどは自分から相手にけんかを売るようにになりました。育ての親は私のことをとても可愛がってくれましたが、14歳のとき、はじめて本当の親子でないことがわかりました。その上、自分には戸籍はおろか、国籍さえないことも知り、大きなショックでした。」深い考えもなく上京したものの世間の目は冷たかった。人を信用できず、誘われた宗教も助けてくれず、ついに飛び込み自殺をはかったが、怖いので思い切り勢いをつけて跳んだところ線路を飛び越えてしまった。死ぬこともできず、一人暮らしのアパートの部屋で、布団をかぶって寝てばかりいたある晩、ラジオで「今晩は、森繁です」という番組が耳に入った。「この番組では、いつも森繁さんが聴取者の悩みやうれしいことなどを放送するので、私が日ごろ思っているミックスのことを訴えたのです。」

“拝啓、私は戦後の落とし子と言われる混血児です。何かと白い目で見られ、今なお人のまえで堂々と歩くことができず、顔を隠して歩く。こんなみじめなことはありません。私の父は黒人です。でも私は父を知りません。生みの母は、私が生まれてすぐ、乳飲み子の私を育ての親に預けて行方知れずになりました。その育ての母も、一昨年亡くなりました。私には黒人の血が流れています。黒い肌です。私は好きこのんで混血児に生まれてきたものではありません。混血児にも日本人の血が流れています。けれど、同情なんていりません。せめて私達を特別な目で見ないでください。ただ、同じ日本人として当たり前のように思ってください。それだけです。私は、今度の5月で19歳になります。”

マイクの前でこの手紙を読む森繁さんの手が細かく震えた。戦争が終わって20年、世間がオリンピック景気に沸いている陰に、こんな気持ちで毎日を送る子がいたのかと、森繁さんは心動かされ、放送は大反響を呼んだ。その話をサンフランシスコの日系紙「日米時事」が記事として載せたところ、それを読んだクラークさんという宣教師の助手をしている青年が、感動して日本に桂子さんを訪ねた。やがて同情は愛情に変わり、桂子さんも、同じ肌のクラークさんに心を開いた。ところが、結婚へゴールインという寸前になって、アメリカ大使館がパスポート発行を拒否した。戦後の混乱期のことだからといくら説明してもらちがあかず、森繁夫妻は桂子さんを養女にすることにした。「それでもアメリカ大使館に駄目だといわれて、今度はお母さま(杏子夫人)が1週間つづけて大使館に抗議にいきました。本当に頑張ってくれて、さすがの大使館も折れてビザを出してくれたのです。そして、今いるこの教会で結婚式をあげました。それからずっと森繁家の養女になって、いまだに家族の一員として迎えられています。」こう話しながら桂子さんは14年前に亡くなったお母さまを思い出して目をうるませた。

ところで、無事に渡米して教会で祝福された新しい人生のスタートを切った桂子さんだったが、自分の過去のわだかまりから解放されるまでには至っていなかった。「**そうなるまでには時間がかかりました。17歳ではじめて生みの親に会ったのですが、映画でみるような感激どころか、反対に私を捨てたことに対する怒りと憎しみで人間不信になり、18歳で自殺未遂をしてからは、神も仏もあるものかという気持ちが強くなりました。ある宗教に無理やりに誘われたこともあります。商売繁昌といいながら育ての両親の店がつぶれたり、肌が黒いのも信じれば白くなりますよとか言われて、かえって信じられませんでした。教会で『愛』を説かれても、それならどうして生みの親が子を捨てるのか、『ゆるせ』といわれても私は全然だめで、すごく反発しました。私が自分から神さまを受け入れたのは教会にきて11年半後です。」**

桂子さんの信仰が目覚めたのは、沖縄のゴスペル・シンガー上原怜子さんとの出会いだった。上原さんも桂子さんと同じ混血児だった。「**彼女がこの教会に伝道にきたときに私の家で寝泊りしてもらったのですが、ある日食事のあとで私に話があるといわれました。そのとき単刀直入、『あなたはイエスさまを受け入れていますか』ときかれたので、私は正直に『いいえ』と答えました。そのときまでの私の考えは『イエスさまが私のこころに入りたいのならどうぞ』という気持ちだったのです。そしたら怜子さんが、『イエスさまがドアをノックしている絵を知っていますね。あのドアは外側にはノブ(取っ手)がありません。あなたが中から開けなければ入ることができないのよ』と言われ、そのときハッとさせられたのです。ああ、イエスさまは十何年間も私の心の戸を一所懸命たたいていたのに、過去のことばかりにこだわってみんなの愛の気持ちまでしめ出していた自分。受けた傷ばかりに気をとられて、本当の愛を見ようとしなかった自分に気づかされたのです。自分で内側から心のドアをあけてイエスさまに入ってもらいました。そのときにはじめて『イエスさま、今までのごめんなさい』という言葉が出てきたのです。そしたら素直に『ごめんなさい』が言えるようになったし、私すごく短気でいつもパツと怒るんですが、まわりで『あなた変わったね』と言われるようになりました。」**白い歯をみせて明るく笑ったあと桂子さんは真顔にもどってこう続けた。「**それにしても森繁夫妻に出会わなかったら、アメリカに来られなかったし、もし日本にいたら、いまだにがむしゃらに働いて信仰的なものは何も受けなかったと思いますね。」**森繁夫妻をはじめ、クラークさん、上原怜子さん、それぞれ自分でも気づかずに人生のまがり角に待ち伏せして桂子さんに愛の手をさしのべ、その役割を果たした。その背後には人をゆりかごから墓場まで計画をもち、目的をもって導いておられる方の意思が働いていることも忘れてはならない。57歳になった桂子さんには3人の子供と、3人の孫がいる。みんな聖書から名前をつけてもらった。「**May God Bless Clark Clan (family)!**」教会を出て大きく深呼吸をした。紺碧の夏空にムクムクと真っ白い入道雲がわきあがっているのが目にとびこんできた。それは何故かとてもまぶしく新鮮に感じられた。

なお、このインタビュー番組(約20分)は、「インターネット放送」でお聞きいただけます。[HCJB日本語放送ホームページ](http://www.hcjb.org/japanese/)(<http://www.hcjb.org/japanese/>)を開いて、画面右側にある「おもいで広場」欄内の「耳で大きく『アンデスの声』」メニューをクリックしてください。

HCJB日本語放送担当

桂 尾崎一夫 久子

【ホームページのご案内】

[HCJB日本語放送のホームページ](http://www.hcjb.org/japanese/)(<http://www.hcjb.org/japanese/>)には、リスナー・コミュニケーションのためのふれあいコーナー「[フォーラム](http://www.hcjb.org/japanese/forums/)」(<http://www.hcjb.org/japanese/forums/>)と、メールマガジンのバックナンバーを揃えた「[メールマガジン e-La Voz らいぶらり](http://www.hcjb.org/japanese/mnz/)」(<http://www.hcjb.org/japanese/mnz/>)のページがあります。どうぞご利用ください。

このメールマガジンは、HCJB日本語放送の管理するメール・リストに登録されている方に無料でお送りしています。

このメールマガジンをご覧になってのご感想やご意見、ご要望などは、[HCJB日本語放送](#)までお送りください。

また、このメールマガジンの配信停止、配信先変更、あるいは新規ご登録は、下の該当ボタンを選択し、必要事項をご記入の上、[この内容で送信する] ボタンをクリックして、手続きをお願いします。なお、**Netscape 6.2以降をお使いの場合、このメールマガジンに埋め込まれているご登録手続きの機能はご利用いただけません。**ご面倒ですが、[HCJB日本語放送](#)まで別途メールにてお知らせください。

配信の停止 (※重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。)

配信変更先のメールアドレス
(※重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。)

新規登録するメールアドレス

この内容で送信する

リセットする

※お送りいただいた内容はメールリスト・サーバにより自動的に処理しますので、余分な内容は一切入れないでください。
※このメールマガジンはコンテンツが大きいため、携帯電話への配信はできません。



Copyright © 2004 by HCJB. All rights reserved.

日本語ホームページ: <http://www.hcjb.org/japanese/>

Eメール: kozaki@hcjb.org

郵便の宛先:

Mr. & Mrs. Kazuo Ozaki

1920 Berkshire Pl., Wheaton, IL 60187-8050, U. S. A.